
黄昏の命 たそがれのみこと

洸淋寺 凧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄昏の命 たそがれのみこと

【Nコード】

N7650D

【作者名】

洸淋寺 凧

【あらすじ】

私は四十分後に命を落とす。走馬灯の駆け巡る中、会いたい人がいる。

私の命も後四十分……。

四十分後、私は癌に侵され他界するだろう。

脳裏に鮮明な動画が流れる。

それは早送りでもなくスロー再生でもない。制止しているわけでもなくなお、普通に動いているわけでもない。

走馬灯が脳内で混沌する。

今私が一番会いたい人物は嫁でもまだ六つになったばかりの娘でも無い。会いたくないわけでもなく、むしろ会いたい位だが、それ以上に会いたい人がいる……。

まだ私が成人したての時に、死を受け入れる事を教わった人物だ……。

その人は尼崎あまやなぎ萄子とうしさんといい、私の幼少期から成人するまでお世話になった人だ。

萄子さんは私の成人式の時に倒れた。

癌によって……。

その時はまだ医療が今ほど発達しておらず、発見が遅れたのだ。時すでに遅し。末期癌だ。

私は病室に横たわる萄子さんに向けて泣きじゃくった。成人したばかり。まだ子供の殻が破れきっていなかった。

「人間はいつか死ぬものです。私の死は癌という名の寿命が来ただけなの。貴方にも私のように病気で死ぬことがあるかもしれません。しかし恐れては行けません！死を受け入れなさい」

そう優しく言って離れて言ったのだ。

それから私は泣かなかった。

萄子さんは死を受け入れたのだ。自ら死と同化する事を認めたのだ。

だから私も荀子さんのようになりたい。もう一度会って今の私の死に様を見届けて欲しい。

確かに死ぬ事は辛い。だが命は永遠ではない。

寿命の遅い早いの問題なだけだ。

よく寿命で死ねてまだよかったとか親族の死をいう人がいるが、病死や、災害で死んでしまう事だって立派な寿命である。

．．．．．

そろそろお別れの時間だ。

闇と光の混じり合うこの世界から私は無の世界へ逝く。

無の世界には力オスは無い。

ただ一直線に延びる無をさ迷い続けるのだ。

螺旋の頂点は平ら。

複雑に絡み合う世の中は螺旋。

無の世界は平ら．．．。

さあ．．．。

目を閉じよう。

黄昏の命に別れを告げ。

螺旋を上り切るのだ。

恐れる物は無い。

深く。

静かに。

そこにあるのは、殻だけだ。

さようなら。

さようなら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7650d/>

黄昏の命 たそがれのみこと

2010年10月24日06時36分発行